機関紙

かんばれ島根!!

【第１０６号】令和 5年 2月 24日 発行

島根・トップコーチ

【発行・担当課】公益財団法人島根県スポーツ協会　競技スポーツ課
〒690－0873　島根県松江市内中原町２０－１　城南ビル３階　℡0852（60）5052

島根県スポーツ協会ホームページ http://www.shimane-sports.or.jp

【第１０６号発刊にあたって】

第１０６号は、本県高校カヌー競技の指導者として、全国高校総体や国体において数々の好成績をおさめる等素晴らしい活躍をされ、令和３年度には「岡田善富賞」を受賞されました島根中央高校カヌー部顧問の堀田育子先生にご登場いただきました。

長年、大分県においてカヌーの指導にあたられ、その間、大分県を「カヌー王国」まで押し上げられた実績をお持ちですが、当時のお話や自らの指導観について語っていただきました。

【プロフィール】
1964 年 大田市三瓶町生まれ
1983 年 邑智高等学校卒業（カヌー部）
1987 年 東京女子体育大学（体育学部）卒業
1987 年 江津市立津宮小学校臨時講師
1988 年 大分県立大分舞鶴高等学校非常勤講師
1989 年 大分県立大分舞鶴高等学校教諭
2013 年 大分県立大分舞鶴高等学校退職
2013 年 大分からあげ専門店開業
2017 年 島根中央高等学校採用

【競技実績】
1981 年 世界ジュニアカヌーレーシング
選手権大会（ブルガリア）日本代表
1982 年 第 37 回島根くにびき国体少年女子優勝
1984 年 アジアカヌー選手権大会日本代表
第 39 回国民体育大会成年女子 3 位
1985 年 世界カヌーレーシング選手権大会
（ベルギー）日本代表
第 40 回国民体育大会成年女子 4 位
1986 年 世界カヌーレーシング選手権大会
（カナダ）日本代表
第 4 1 回国民体育大会成年女子 5 位

【指導実績】
1996 年 第 51 回広島国体競技別総合優勝
1997 年 第 52 回大阪国体競技別総合優勝
世界ジュニアカヌー選手権大会
コーチ（フィンランド）
1999 年 第 54 回熊本国体競技別総合優勝
2007 年 第 62 回秋田国体競技別総合優勝
2008 年 第 63 回大分国体競技別総合優勝
1996 年～ドイツ・スロバキア・オーストリア・
中国・韓国・イランコーチ
2021 年 世界ジュニアカヌースプリント
選手権大会コーチ　（ポルトガル）
全国高等学校総合体育大会
カヤックフォア 500m 優勝

「 意志あらば道拓く 」

島根県立島根中央高等学校
カヌー部 顧問　堀田育子

１．はじめに

私の人生は、カヌー競技と出会ってから今日まで、決して平坦な道のりではありませんでした。想像もしていなかった出来事が起こり、悩んだり、苦しんだり、そしてたくさんの人達との貴重な出逢いがあり、波瀾万丈な人生でした。この度、約 40 年間のカヌー人生を振り返る機会を頂き感謝と同時に、この波瀾万丈な人生をどのように表現すればよいのか大変悩みました。40 年間の私の生様を書いたところで大して面白くもないでしょう。

でも、いろいろな体験をしたことが、これから国スポ島根大会に向けて第一線で戦う若人たちの指導に少しでもヒントとなればと思い書いてみることにしました。

２．指導者として大分県へ

【ゼロからのスタート 25 年間の軌跡】

1987 年 6 月、大学を卒業して 2 か月、カヌー競技を引退し島根県に帰郷しました。その後、江津市の小学校で臨時講師をしながら、時間があるときは江の川高校（現在の石見智翠水館高校）のカヌー部の練習を観に行っていました。選手として生きていく事に疲れを

感じて引退した私でしたが、目標をもって取り組んでいる生徒たちの姿を見て、「カヌーの指導に携わりたい。自分の生徒にカヌーを教えたい」と思うようになりました。そんな時「大分県でカヌーの指導者を探している。堀田行ってみないか？」という話を頂いて、自分の中で「指導してみたい」という思いが強くなりました。反対する母には本音が言えず、「行く気はない」と言い続けていました。父が母に「大分県行きは自分で決めさせる。自分たちが邪魔をしてはいけない。この子は今まで自分の意志で生きてきた子だ」と話してくれたようで、母が「自分で決めなさい」と言ってくれた時には「頑張ってみたい」と即答したのを覚えています。

1988 年 4 月 1 日、大分県に入り、私の目に一番に飛び込んできたのが大分川でした。穏やかで雄大な大分川に一目ぼれをしてしまいました。まだ出逢っていないカヌーの教え子達と大分川で練習ができると思うだけで心がワクワクしました。

そして、大分県立大分舞鶴高校に非常勤講師として勤務が決まり、カヌー同好会が発足しました。同時に、前年度にカヌー部発足の大分桜ケ丘高校（現在　楊志館高校）との合同練習が始まりました。大分県に来る前に言われたことは、「環境が整っている」（艇やパドルがある、艇を置く場所がある）「やる気のある生徒がいる・・・。」全くありませんでした。全てがゼロからのスタートでした。艇もない、パドルもない、お金もない、やる気のある選手もいない。「１年間頑張って島根に帰ろう」と心に決めました。

大分県に赴任してゼロからのスタートでしたが、たくさんの方々のご支援と生徒たちの努力のお陰でどんどん競技力が上がっていきました。島根県に帰りたいと思う暇がないくらい毎日必死に戦いました。艇庫を持たない私たちに、土地と建物を提供してくれた秋月さん（故秋月計器会長）や、廃棄処分になった艇を譲ってくれた先輩のお陰で頑張ることが出来ました。水道のない小屋では、井戸水をくみ上げて、まずは艇を洗い次に自分の顔を洗うというのが生徒の中では常識になっていました。譲ってもらった艇の中には半分に折れた艇もあり、樹脂で固めて乗れるようにするなど、できることは何でもやりました。台風が来る度に小屋に水が流れ込み、生徒たちと溜まった水を外に出すという作業をして練習をしていました。それが当たり前であるかのように一生懸命に作業をしている生徒達を見ると、涙があふれ「悔しい！絶対に勝たしてやる！」と心に誓いました。決して恵まれた環境ではありませんでしたが、少しずつ、全国で戦える選手が育ち、新しい艇も増え徐々にカヌー王国へと近づいていきました。

1994 年には初の日本代表が育ち、1996 年には５名の日本代表が育ち、第 51 回広島国体で初のカヌー競技別総合優勝を勝ち取ることが出来ました。第 52 回大阪国体で 2 年連続カヌー競技別総合優勝を勝ち取り、5 名の日本代表選手を輩出しました。それから、毎年日本代表選手が育ち、国体や全国大会で上位入賞者が増えていきました。「カヌー王国大分」と呼ばれるようになりました。

2000 年（平成 12 年）に、高校生のためにカヌー艇庫が完成し、「有難い」という思いと同時に「不安」な気持ちになったのも事実でした。それまでの私達は、ハングリー精神のもと戦っていたので、「こんなに幸せになっていいのか」と心配になりました。実際、25 年間で競技別総合優勝 5 回のうち 3 回は旧艇庫でした。昔は、ハード面が充実していないことで逆に工夫して練習に取り組んでいました。鉄棒がなくても、建物を利用して懸垂をし、ウエイト器具がなくても、自然を利用してトレーニングすることが出来ました。新艇庫が建ったことで、台風や、水害の心配もなく、艇を室内に保管できるようになりました。恵まれた環境は、有り難いことでそれを使う私たちがどのような心構えで使用するかが大切だと知りました。生徒たちは、恵まれた環境の中で着実に力をつけていきました。

2007 年第 62 回秋田国体、2008 年第 63 回チャレンジ大分国体で 2 年連続競技別総合優勝を勝ち取り、選手たちと共に最高の喜びを味わうことが出来ました。

大分国体が終わって、監督としての区切りをつけて後進の育成に力を入れるべきだと判断しました。次年度の新潟国体では総合優勝は逃しましたが、大活躍でこれからの大分県カヌーを教え子に託すことに後悔はありませんでした。

2013 年 2 月、応援してくれた父の看病のために退職をして島根県に帰郷することを決意しました。突然の決断に多くの方々を驚かせ、ご迷惑をお掛けすることになりました。2 ヶ月という短い時間で大分県カヌーをこれまで

以上に躍進させるための手筈を整え、4 月 5 日大分県を後にしました。

３．記憶に残る６回の国体

① 第５１回広島国体（1996 年）

大分県に赴任して９年目にして初めてのカヌー競技別総合優勝【103 点】を獲得。大分県に来てゼロからのスタートで頂点に。少年勢全員が入賞しての総合 V。

② 第５２回大阪国体（1997 年）

２年連続のカヌー競技別総合優勝【103 点】を獲得。2004 年アテネオリンピック代表の足立美穂が２年連続で優勝して総合優勝に貢献。ジュニア日本代表選手が活躍、3 種目で優勝して総合優勝に貢献。

③ 第５４回熊本国体（1999 年）

カヌー競技別総合優勝【109 点】

会場が水俣湾で荒れたコースに苦戦。優秀な選手たちが続々と沈没していき、まるで生き残りゲームのような状況に大分県と熊本県の選手は、確実に決勝に勝ち上がり、最後の少年男子カヤックフォアの順位でどちらかの総合優勝が決まるという場面で、大分県が熊本県より一つ上位で総合 V。皆で抱き合って喜んだことを昨日のことのように思い出す。

④ 第６２回秋田国体（2007 年）

カヌー競技別総合優勝【212 点】

大分国体を翌年に控えて少年勢は最強ともいうべき布陣が揃う。

競技得点 212 点は、過去最高得点。「大分国体はすでに始まっている」を合言葉に挑んだ大会。選手たちと大分国体の目標が 2 年連続 5 回目の総合優勝をすることだと大会前に決めていた。秋田国体優勝は大分県カヌーが一つになった瞬間だった。

大分国体が楽しみになった。

⑤ 第６３回大分チャレンジ国体（2008 年）

2 年連続５回目のカヌー競技別総合優勝【186 点】

前年の秋田から大分国体は始まっていた。しかし、昨年とは違うメンバーで戦っていかなければならない。少年勢の層の薄さ，成年勢の怪我等で心配は尽きなかった。中々仕上がらないことに焦りを感じていた。秋田国体が終わってからは、週末・長期休業は合宿の連続。「一人が勝てば良いわけではない、全員入賞！」を目指した。「総合２連覇」という目標があったからみんなで頑張ることが出来た。4 日間の競技日程で前半の 500m で 100 点獲得。大分国体 186 点を獲得して２年連続５回目の総合優勝を達成した。

卒業生が、選手として、競技役員として盛り上げた国体。ブロンズ像を手にした時は大分県カヌーが一つになった瞬間だった。

大分県に来て、本当に良かったと思えた幸せな瞬間だった。

来年は第 64 回新潟国体・・・総合 3 連覇を狙わないわけにはいかない。新たな目標を立てて新潟に向けてスタートした。

⑥ 第６４回新潟国体（2009 年）

カヌー競技別総合準優勝【130 点】

新潟の会場は海。荒波で熊本国体を思い出すような最悪な会場。大会前に穏やかだったコースが一変。最悪な状況にも、選手たちは最後まであきらめずに戦い抜いた。

新潟国体目標は 150 点獲得の総合 V。この年は愛知県・山形県・香川県など熾烈な戦いのため得点が割れた。愛知県に 3 点差で敗退の準優勝。選手たちは、「自分たちがあと一つ順位を上げれば」と泣いた。皆で戦って、やっと大分国体が終わった。

４．大切にしていること

【心掛けていること】

・今を大切にする。見て見ぬふりをせず大事なことはその時に伝える。昔の負けたときの辛さが蘇える。
・生徒と一緒にいる《とにかく生徒を観る》生徒の気持ち・技術を観る目が大切。生徒の体調まで観えてくる。
・生徒の姿は自分の姿だと思うようにした。
・生徒を変える前に自分が変わらなければならない。
・今までも、練習を大事にしてきたが、とにかく生徒の考えていることを少しでも理解するために練習を一番大切にする。
・昔のように、勝ちたいという思いは変わらないが、今は、過程を大事にできるようになった。
・毎日生徒と一緒にいたら、目標に向けてたくさん悩み、頑張っているのがわかるので、試合で生徒が出した結果であれば何でも良いと思えるようになった。
・毎日の練習は、とても厳しい。大会で生徒を泣かすわけにはいかない

・後悔はしたくない。今この瞬間は二度とない！！
・生徒は目標達成するために私のもとにいる。だから私がいい加減ではいけない。
・結果を出してやらなければならない。本気で向き合う！！
・練習で泣かして試合は笑わせる。これが私のやり方。
・嫌われてもかまわない。負けたときの涙を見るよりは・・・・。
・生徒は、指導者の本当の姿、思いを知ったら、自分の目標達成のために精一杯頑張る。
・私も生徒のように純粋でありたい。いつも本音で本気でぶつかっているつもり。
・指導者は、手を抜いてはいけない。毎日が真剣勝負！
・いくら話が上手くても子どもはだませない。
・1～3 年かけて、じっくり信頼関係をつくっていかなければならない。１年生で、生活態度、人の気持ちのわかる人、心を大切に出来る人になる。それをしていないと、2、3 年で目標達成はない。
・試合を通してとにかく何かを感じてほしい。毎日一所懸命生きていたら、心が動くことがたくさんある。勝っても、負けたとしても何かを感じることが大切。喜び、悔しさ、辛さ、全て次につながることだと思うから何かを感じてもらいたい。
・生徒の目標と私の目標は同じ、ひとつでなくてはならない。私は、常に高い目標をもっていたい。
・冬練習での指導中は手袋をしない。
・自分の進んでいる道を踏み外すことなく一所懸命生きていたら必ず良いことがある。意志があるのならば道は開く。

“意志あらば道拓く”

５．第３のカヌー人生をスタート
【～運命のままに～】

父の看病のために島根県に帰省して、１年間は父と一緒に過ごすことが出来ました。長い間、わがままのし放題で、心配をかけました。自己満足ですが、悔いなく送り出すことが出来ました。

父の死後、飲食店の店主として働いてはいましたが、やはりカヌーへの思いを絶つことはできませんでした。

そんな中、奇跡的に「島根県の教員採用が全校種・職種で 59 歳まで年齢制限の緩和措置がとられた」という事で、教職に就く従兄から「受けてみたら」と連絡があり、思い切って受験しました。52 歳にして親子ほどの年の差のある受験生達と受けた採用試験は最高で、採用試験のための勉強や実技試験や小論文対策も心から楽しむことができました。

今は、島根中央高校（邑智高校）で選手達と「日本一・世界で入賞」を目指して日々頑張っています。私のカヌー人生は、おそらく島根中央高校で最後になることと思います。

これまでの人生を振り返り、全ての出来事がこの島根中央高校に戻って来るためのものであったのではないかと思えてなりません。だから、私は、瀬古先生が 35 年間大切に守り続けたカヌー部を引き継ぎ、選手達が次のステージで幸せに生きてくれることを願い、最後まで今を大事に頑張りたいと思います。

選手からの一言

●行田朋晃 選手
（島根中央高校→鹿屋体育大学１年）

私にとってカヌー部で過ごした高校時代の 3 年間全てが、今でも忘れられない思い出になっています。入部当初に堀田先生にかけていただいた一言で、私はそれまでの自分を客観的に見直し、心を入れ替え、謙虚な気持ちで 3 年間カヌー競技に没頭することができました。堀田先生には、カヌーのことはもちろんですが、日常生活での大切なこともたくさん教わり、鍛えていただきました。その一つが、常日頃から自分にできることを見つけ率先して動くことです。練習では一回一回を中途半端にせず、自分が満足できるまでやること。メニューでは全部出し切ることを今でも続けています。堀田先生は、自分のことより私たち生徒のことをいつも一番に考えてくださり、真剣に向き合って指導してくださいました。練習後には、おにぎりやゆで卵を食べさせてくださり、楽しく笑い合えたことも心に残っています。

私の今後の抱負は、日本代表、インカレ優勝です。国民スポーツ大会では、島根県代表となり島根県に貢献できる結果を残せるよう頑張っていきたいです。

【行田朋晃（ゆきた ともあき）】
中学校でカヌー競技を始め、高校時代に堀田監督の指導を受け急成長し全国大会で数多くの入賞を果たす。21 年には全国高校総体 K-4 200m で優勝。カヌースプリントジュニア世界選手権に日本代表として出場。2030 年に島根県で開催予定の国民スポーツ大会では選手そして指導者としての参加を目指している。